財団法人鍋島報效会研究助成
研究報告書　第４号

2009年10月

財団法人鍋島報效会

目　　次

第７回研究助成報告

石橋道秀「鍋島家文書によって解明される16世紀末‘、’の音韻に関する新見解
—仮名書き朝鮮語の分析を通して—」 …… 1
山本紗英子「柿右衛門様式磁器にみる和様人物文様の意義・系譜」……17
星原大輔「幕末明治期の大木喬任日記」……37
山本晴彦「佐賀県における農業気象災害の変遷と回避・減災対策の提案」……57

報告会講評……79
佐賀女子短期大学 学長　　高島　忠平

第８回研究助成報告

柴山　薫「佐野常民と看護教育 —佐野常民の新しい人物像を求めて—」 ……81
福井尚寿「蒼海副島種臣の書研究 —書風変遷を中心として—」 ……97
佐賀農業高等学校生産科学生物工学班
「シチメンソウの増殖研究 —有明海沿岸における生育地の環境調査研究—」…111
細川金也「有明海北岸出土の弥生時代青銅器の研究
—弥生時代青銅鏡の分布と地域性—」 ……125

報告会講評 ……157
佐賀大学 名誉教授　　長野　暹

鍋島家文書によって解明される16世紀末‘、’の音韻に関する新見解
－仮名書き朝鮮語の分析を通して－

佐賀県立図書館
石　橋　道　秀

Ⅰはじめに
1.1. 研究の目的
1.2. 研究の内容と方法
1.3. 仮名書き朝鮮語資料
Ⅱ中世韓国語の母音体系
2.1.15世紀の母音図
2.2.‘、(@)’の音変化
2.3.‘、(@)’に関する先行研究
Ⅲ仮名書き朝鮮語資料の書誌事項
3.1. 仮名書き朝鮮語資料の概観
3.2.16世紀末の仮名書き朝鮮語資料
3.2.1.「泰長院明彬全羅道康津縣十八社数等書出」等
3.2.2.『旧記写』
3.2.3.『天正以後聞書』
3.2.4.「高麗日記」(『田尻家譜』)
Ⅳ韓国語と仮名表記との対応
Ⅴまとめ

Ⅰ はじめに

1.1. 研究の目的

韓国語史上、中期語（以下「MK」）は16世紀までとする考え方が一般的であり、16世紀末はMKと近代との分水嶺にあたる時代である。

MKの母音の中で、ただ一つどんな発音であったのか解明が待たれている母音が一つある。それを‘araea’と呼ぶが、‘、’(以下‘、(@)’」)で表される。

本稿は、仮名書き朝鮮語の分析によって、‘、(@)’の音韻について明らかになったことを実証的に述べることを目的とする。

仮名書き朝鮮語とは、韓国語を仮名で表した文字資料を指し、志部昭平(1988)で用いられた用語である。また、仮名書き朝鮮語を含む資料を仮名書き朝鮮語資料と呼ぶ。これは国内仮名資料に属する文字資料であり、「日本語を母語とするものの手により仮名を主体として表記された資料[1]」を指す。

[1]安田章(1990:2)『外国資料と中世韓国語』東京、三省堂。

柿右衛門様式磁器にみる和様人物文様の意義・系譜

九州産業大学博士後期課程
山　本　　紗　英　子

はじめに

日本の色絵を代表する柿右衛門様式磁器に描かれた絵付け文様の多くは、花鳥文様や吉祥文様である。そのためか、柿右衛門様式磁器に描かれた人物文様に関する研究は、ほとんどなされなかった。しかしながら、近年において国内外の調査が進み、柿右衛門様式磁器の実態が明らかにされるなか、人物文様を描いた作品も美術館展示や図録などに多数登場するようになった。このことからも、これまで以上に柿右衛門様式磁器に描かれた人物文様に関する研究や分類、意義解明の必要性が求められる。

従来、柿右衛門様式磁器にみる人物文様についての研究は、唐様人物文様を中心に展開されるものの人物文様の分類や意義、図像についての解明は、これまでほとんどなされていない。柿右衛門様式磁器における人物文様研究が難航している原因は、絵付けをする際に柿右衛門家などで手本としたお手本帳などの粉本が残されていないことが根底にあった。そのため、人物文様に限らず、どの絵付け文様に関しても典拠を問う場合、当時の流行や流通していたと考えられる版本からの手がかりを得るにとどまっている。また、絵手本の流通についても手がかりとなる資料はほとんど残されていないのが現状である。

現在、論者は、柿右衛門様式磁器に描かれた人物文様を唐様人物のみならず、和様人物と混淆様人物の三つに大別している。これらの描かれた人物文様の様相を明らかにすることにより、影響を受けた文化や背景、当時の流行や美意識を学ぶことができると考える。柿右衛門様式磁器に描かれる人物文様を分類し、それらの図像を解き明かすことにより、柿右衛門様式が日本・中国の東洋美術に対し、どのような表現を好み追究したのかを理解することができるであろう。そこから、柿右衛門様式磁器に描かれた人物文様から新たな柿右衛門様式磁器研究の展望が生まれることが期待される。なお、本論では、和様人物を中心にみていくことにする。

幕末明治期の大木喬任日記

早稲田大学博士後期課程
星　原　大　輔

はじめに

「薩長土肥」という言葉は、幕末維新期を対象とする歴史研究や歴史小説などで、よく目にする言葉の一つであろう。これは、幕末期、「雄藩」と呼ばれ、かつ、明治維新を推進して明治政府の主要官職に人材を供給した薩摩藩、長州藩、土佐藩、肥前藩4藩を指す言葉である。

大木喬任

小林雄七郎は『薩長土肥』[1]で「戊辰以来二十有余年間、日本の政治社会は依然薩長土肥政治家の管理する所」[2]であるとして、このうち肥前藩出身の政治家を「戊辰前強藩中、文章才辨を以て天下に鳴りたる者」と評価している。そしてその「文勲」の具体例を、以下のように列挙している。

> 民部大蔵の事務を整理して今日内治の基を開きたる者、肥前政治家の功多きに居る。大中小学を起し師範学校を創め、吾人同胞子弟をして欧米各国に恥ぢざる各種教育を受るを得せしめたる者、肥前政治家の功多きに居る。司法の範囲を規定し大小の訴廳を開立し、竟に裁判独立の基礎を創置せし者、肥前政治家の功多きに居る。天狗的英公使の鼻頭を折じき、之をして遂に対等の地位に屈せしめし者、肥前政治家の功多きに居る[3]。

さらに小林は言う。「薩長は主人にして土肥は客分たる情実」であるにも拘らす、「天下をして維新政府は即ち薩長土肥政府なりの感あるを覚え」せしめたのは、「土肥が人材の薺々たる能く薩長と並立て、共に天下を経綸するに足れる」ようになったからである、と[4]。この「人材」こそが、いわゆる“佐賀七賢人”と称されている人物たちである。すなわち鍋島直正（文化11～明治４）、江藤新平（天保５～明治７）、大木喬任（天保３～明治32）、大隈重信（天保９～大正11）、佐野常民（文政５～明治35）、島義勇（文政５～明治７）、副島種臣（文政11～明治38）である。それぞれが、小林が列挙した「文勲」に少なからず関わっていることは贅言を要さないだろう。

ところで薩長土肥と称されるけれども、“薩長土”と比べると、現在、幕末期の佐賀藩や上記の七賢人をはじめとする人物を対象とした研究が少ないのが現状である。その理由は色々あるであろうが、史料集が殆どないこともその一因として挙げられよう。そのため、関係人物の書翰や書類などが、多くの人

佐賀県における農業気象災害の変遷と回避・減災対策の提案

山口大学農学部
山　本　晴　彦

1．はじめに

佐賀県は九州北西部に位置し、北東部は脊振山系が福岡県との県境、南東部は福岡県の筑後地方まで続く平坦な筑紫平野（佐賀平野）が大部分を占める。県西部は、東松浦半島から多良岳山系にかけての中山間地域により構成される。県の面積 は2439.31 ㎢、耕地はその約40％で全国平均の２倍の耕地率を有し、水田裏作としての麦作が盛んなことから耕地利用率（耕地面積に対する作付面積の割合）は133％と全国の中でも高い水準にある。このため、2005（平成17）年の農業粗生産額も1,400億円弱と農業が盛んな県に属する。

有明海を南に望む佐賀平野は、長年にわたる大規模な干拓事業の推進によって有数の穀倉地帯となっている。主要農産物の稲作は、昭和８年から昭和10年にかけて単収量（10a＝1,000㎡当たりの収穫量）が全国一となり、「佐賀段階」と呼ばれて全国の農業、農村の目標の的となった。戦後は、干ばつに悩まされてきた本地域に国営の土地改良事業が開始され、農業用水が確保された。栽培方法や農薬など基本的な農作業の基準を統一した効率的な生産手法は「新佐賀段階」と呼ばれ、2年連続で米の単収日本一に輝き、全国でも有数の米どころとしての地位を確立した。

2007（平成19）年の水稲の作付面積は28,100ha、収穫量が141,600tと、九州では福岡県、熊本県に次いで第3位の米どころとなっている。しかし、近年は台風や集中豪雨などの異常気象により農業気象災害が頻発しており、佐賀県においても農作物の減収や品質低下が顕著に現れている。本研究では、佐賀県における農業気象災害の変遷を分析すると伴に、とくに台風による潮風害（塩害）の実態を分析し、回避・減災対策の提案を行うことを目的としている。

2．農業気象災害の概要

気象現象がある限界を超えた異常な条件によって受ける被害を「気象災害」と言い、「災害」は、広辞苑では「異常な自然現象や人為的な原因によって、人間の社会生活や人命の受ける被害」と記載されている。また、国土並びに国民の生命、身体及び財産を災害から保護する目的で制定された「災害対策基本法」の第２条では、「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火その他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他その及ぼす被害の程度においてこれらに類する政令で定める原因により生ずる被害」と定義している。

第７回研究助成報告会講評

佐賀女子短期大学 学長　高　島　忠　平

１、鍋島家文書によって解明される16世紀末‘丶’の音韻に関する新見解
－仮名書き朝鮮語の分析を通して－

佐賀県立図書館　石　橋　道　秀

〈評〉

鍋島家文書の仮名書き朝鮮語資料を用いて、韓国(朝鮮)語史研究史上、重要な位置をしめる15から16世紀の古代韓国語と近世韓国語の間にある中期韓国語の母音の研究に重要な成果をあげた。中期韓国語の母音のなかで発音が不明であった母音アレアを16世紀末の韓国語の母音と日本語母音のマトリックスを作成、16世紀末には、アレアがそのまま音価を維持していたことを証明した。そのことによって、これまでの中期韓国語の音韻研究に再考をうながすものである。なお、16世紀末の鍋島藩(肥前)の発音と当時の韓国語との近親性が窺えて興味深い。今後、この研究を一層深めるとともに、論の多い日本語と韓国語との関係の歴史にも迫って欲しい。

２、柿右衛門様式磁器にみる和様人物文様の意義・系譜

九州産業大学博士後期課程　山　本　紗英子

〈評〉

一般に柿右衛門様式と呼ばれる色絵磁器は、花鳥文や吉祥文が多いが、人物文様をもつものが優品のなかにみられることは知られていた。その中で、和様の人物文に着目して、その画材に、『源氏物語』「若菜」の一場面や元禄期の浮世絵などに見られる風俗画が描かれ、それが物語性を有していることから、時代の人々の知識や教養を窺えるものとして位置づけようとしている。また、製作と需要において、その目的が、階級性・階層性や、肥前色絵磁器の美的関心のみでなく、当時の日本文化の世界的認識性をもうかがわせる研究である。今後、広く資料にあたり、研究を広げられることを期待したい。

３、幕末明治期の大木喬任日記

早稲田大学博士後期課程　星　原　大　輔

〈評〉

幕末・明治維新期の雄藩である肥前の政治家、つまり、鍋島直正・江藤新平・大木喬任・大隈重信・佐野常民・島義勇・副島種臣の佐賀の七賢人の研究が、薩長土と比べると少ないとされているが、それは史料集がほとんどないことにあるとされている。そこで、数量的には圧倒的に多い大木喬任史料を国

佐野常民と看護教育
－佐野常民の新しい人物像を求めて－

佐賀大学医学部看護学科４年
柴　山　　薫

はじめに

「佐野常民」という人物の名前を聞くとどのようなことを思い浮かべるだろうか。私は、幼い頃から「日本赤十字の父」として佐野氏の存在を知っていた。

「佐野常民」は、佐賀の七賢人の一人として、日本海軍の基礎造りに尽力し、蒸気鑵を制作する等、幕末のものづくりをはじめ、日本赤十字を創設した人物として、大きな足跡を残したことは、佐賀県民には広く知られている。しかし、日本赤十字社創設とともに、自らが看護教育を行ったことはなかなか知られていないというのが現状である。

私自身も看護学生であるが、佐野氏がどのような看護教育を行っていたのか知らず、看護を学んでいく上で、佐野氏の当時の看護教育がどういうものであったのか知りたいと考え、この研究を始めた。また、私の通っている佐賀大学医学部看護学科（平成14年度までは、「佐賀医科大学」）は、その佐野氏の出身地の佐賀市にあり、４年制の看護大学としては歴史を有する大学である。現在、私が学んでいる大学での学習内容の中に、佐野氏の精神が生かされているのかを検討し、今後の看護教育のあり方を考えたいと思う。

佐野氏の説いた看護教育について学ぶと共に、佐野氏の新たな一面にふれることができればと思う。

研究を始めるにあたり

初めてこのような研究というものを行うにあたり、文献の検索、資料の収集ととてもとまどうことばかりであった。まずは、文献を探すこと、そして「日赤の創始者　佐野常民」の著者である吉川龍子氏に話を聞くために、東京へ向かった。日本赤十字看護大学や日本赤十字社本社内にある日赤情報プラザを訪れ、調査をすすめた。また、佐賀市川副町の佐野常民記念館には何度も足を運んだ。しかし、調査を進めるに当たり、諸先輩方から話を伺い予想はしていたものの、その文献の圧倒的少なさに驚いた。数少ない文献の中の多くは博愛社（日本赤十字）の設立経緯に関するもので、佐野氏の看護教育に関する記述は極めて少ないことがわかってきた。佐野氏は教職として、直接教育に携わったというわけでなく、日本赤十字社の社長として看護師のあり方、精神的教育を救護出発時や卒業生に向けて、言葉として残している程度であった。研究計画を立てた段階では、明治期における看護婦養成とは、看護教育を行った佐野氏のみであると私は思っていた。しかし、研究をすすめるうちに、同時期に全国の様々な場

蒼海副島種臣の書研究

－書風変遷を中心として－

佐賀県立美術館
福　井　尚　寿

研究の目的

78年におよぶ生涯において、蒼海こと副島種臣（1828～1905）は多くの書を残している。全体数は不明だが、変化に富む多様性が蒼海書の特色であり、また魅力といえるだろう。

はじめて蒼海書の「書風の区分」を試みたのは伊東卓治氏で、昭和30年（1955）発行の書道雑誌『墨美』43号・特集「副島種臣」収録「副島蒼海先生」において11分類の区分が提示される。伊東氏の「書風の区分」は後述するが、国立文化財研究所（現在の東京文化財研究所）の美術史研究者であった伊東氏は蒼海書の多様性、独特の字形、年記作品の少なさをあげて、つぎのように「年次的把握」の困難さについて記している。

「帰雲飛雨」額　佐賀県立美術館蔵

…総体に蒼海先生は新しい自己を次々に打出して行った希に見る弾力性のある芸術家であった。…蒼海先生の多面多貌は何と驚嘆すべき作家であらうか。…このことは直ちに、字形に先生独特の形をとらせるやうになった。大変読みにくい字を書いていられるということになった。…そこに常識を遥かに超越した字形が生れ、われわれには読み下しにくいという結果になった。…且つ先生の作品には年記を欠くものが多い。しかも端倪すべからざる幾変転の様式変化がある。それ故色々異れる面を色々異れる表現に及ぼしている作例に遭遇するのであるから、卒然としてそれの年次を遂っての把握ということになると、中々出来ない相談である。それ故蒼海先生はわれわれ凡人にとっては、年次的把握が困難な上に、釈文をとることまでむづ(ママ)かしいとあっては、まあ、手のつけやうもないという他あるまい。

伊藤氏の「書風の区分」から半世紀以上が経過した現在、状況はどうであろうか。いまだ書風変遷の把握が不十分と痛感したのは、平成18年（2006）1月1日から同29日まで開催の「没後100年記念 蒼海 副島種臣―全心の書―」展（主催：佐賀県立美術館・佐賀新聞社、会場：佐賀県立美術館）の企画にたずさわったときである。展示作品の選定に際して出来はもちろんのこと、書風変遷の概観を目的として年記作品を重視、出品総数140点のうち掛幅・扁額・屏風などの作品130点、制作年の判明する作品は56点をかぞえた。展示および図録の構成は制作年代順を基本とし、年記のない作例でも1、2年、最大でも5年程度の誤差で配列できたと確信した。しかし130点のうち制作年判明作品56点という割合の多さにもかか

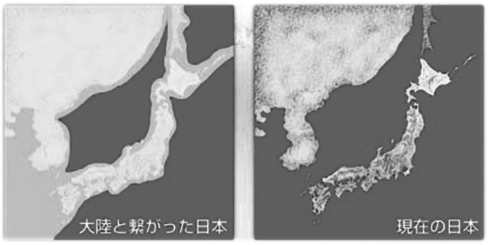
シチメンソウの増殖研究

－有明海沿岸における生育地の環境調査研究－

佐賀県立佐賀農業高等学校　生産科学生物工学班
生産科学科３年　樋　口　　徹
生産科学科３年　山　本　　潤
生産科学科３年　本　山　大　喜
生産科学科３年　山　中　健太郎

活動の動機

有明海の風物詩であるシチメンソウに興味を持ち始めたのは１年生の２学期頃でした。既に先輩達は、シチメンソウの研究に取り組んでおられ、研究活動が３年目の冬を迎える頃、校内で栽培した種子の採取が私たちの研究のスタートでした。



国内では有明海でしか見ることのできない生き物たちは、約１万年前、大陸続きだった日本列島が切り離されていく過程で有明海に取り残されてしまったものといわれています。塩生植物であるシチメンソウも、有明海沿岸と国外では朝鮮半島に自生地が限られていることから、私たちはシチメンソウもムツゴロウなどと同様に、大陸系遺留種ではないかと推測しています。そのようなことを考えると、ますますシチメンソウに興味を持つようになり、環境省により絶滅危惧II類に指定されているシチメンソウを未来に残したいと強く願うようになりました。

これまでの主な活動

培養研究　(平成１６年度)器官培養による増殖研究(にがり培地・海水培地の研究)
　　(平成１７年度)器官培養による増殖研究(脱分化作用のための培地の検討)
　　(平成１８年度)器官培養による増殖研究(ホウレンソウ不定胚培養の応用実験)
　　(平成１９年度)器官培養による増殖研究(脱分化に成功)
栽培研究　(平成１６年度)ワグネルポットによる校内での栽培観察
　　(平成１７年度)潮の干満を再現した簡易自動潅水ベットの完成
　　(平成１８年度)簡易自動潅水ベットの改良
　　真水と簡易土壌を用いた栽培比較試験
　　(平成１９年度)真水と簡易土壌を用いた栽培比較試験(自動潅水ベットの応用)
野外調査　(平成１６年度)福富海岸での年間生育調査
　　(平成１７年度)諫早湾現地視察

有明海北岸出土の弥生時代青銅器の研究

－弥生時代青銅鏡の分布と地域性－

佐賀県教育委員会　文化課
細　川　金　也

1　はじめに

九州西部に位置する有明海は、三方を山や平地に囲まれた波穏やかな内海である。太良岳、雲仙岳等から噴出された火山灰堆積物や九州最大の河川である筑後川を始めとする河川から多量の土砂が流れ込み、水深は約20mと浅い。干満の差は、最大6mに及び、干潮時には、広大な干潟が出現する。特に、有明海北岸に位置する佐賀平野では、干潟が陸化し、幅広い沖積平野が形成される。この広大な平野の存在は、吉野ヶ里遺跡を始めとするこの地域の弥生時代文化を支える大きな生産基盤となった。

弥生文化を代表とする青銅器には、銅剣や銅戈・銅矛等の武器形青銅器、銅鉇、銅鋤先、銅斧等の工具、銅鏡や銅腕輪、銅釧等の装身具、他にも巴形銅器などがある。これらの青銅器は、当初、中国大陸や朝鮮半島から持ち込まれたものであったが、弥生時代中期には、日本列島内で生産が開始された。特に、有明海沿岸地域の中でも佐賀平野が初期青銅器生産の中心的存在であったことが、遺跡から発見される青銅器鋳型の存在から明らかである[1)]。

また、有明海沿岸の諸遺跡からは、武器形青銅器や漢鏡を副葬する墳墓が多数存在するほか、集落からも青銅器が多数出土しており、弥生時代青銅器を研究する上でも重要な地域のひとつである。

この地域の青銅器は、弥生時代研究者の論考に数多く取り上げられてはいるが、地元の研究者により体系的にまとめられたものは少ない。そのためか、弥生時代に奴国や伊都国の領域と考えられている玄界灘沿岸の諸遺跡と比較した場合、有明海北岸地域の遺跡は、北部九州の周縁地域として取り扱われる傾向がみられる。

この比較が正しいかどうか、佐賀平野を始めとする有明海北岸地域の青銅器研究の進展によるものが大きい。そのためにも、青銅器地名表の作成など基礎的な作業を行い、当該地域の青銅器の状況を明らかにする必要がある。

本論では、有明海北岸地域の青銅器のうち、大陸・半島から持ち込まれた漢鏡等の舶載鏡、列島内で作成された仿製鏡を対象として分析を行う。当該地域では、弥生時代から古墳時代初頭にかけて舶載鏡52面、小型倣製鏡44面が出土している。精緻な文様を持つ朝鮮半島産の多鈕細文鏡や前漢・後漢時代の漢鏡、列島産の鏡など多種多様である。

この弥生時代青銅鏡の分析を進め、有明海北岸地域の地域性を明らかにすることにより、北部九州だけでなく、西日本各地域と比較することが可能になり、有明海北岸地域の青銅器研究の一助になると考えられる。

第８回研究助成報告会講評

佐賀大学 名誉教授　長　野　　遲

１、佐野常民と看護教育　－佐野常民の新しい人物像を求めて－

佐賀大学医学部看護学科４年　柴　山　　薫

〈評〉

看護学専攻ということから佐野常民の解明を目指し、それが新しい視点の提供となっている。

看護教育を創設期・発展期・拡大期に分け、佐野常民とその目指したものとの関わりを検討している。

1867年のパリ万国博覧会と1873年のウィーン万国博覧会での赤十字社の存在と活躍が佐野に大きな印象を与え、それが1877年の西南戦争の折りに「博愛社」の救護活動となり、それは「人道・博愛」の精神に基づくものであったと記している。1890年に看護婦養成が開始され、翌年の濃尾大地震の折りに救護所に派遣される看護婦に対して、佐野は至誠・奮勉・節操を旨とすることを訓示し、これが看護婦への最初のものであったと位置づけている。1896年の「日本赤十字地方看護学教程」の序論10か条は佐野の考えに基づくものとしている。1898年の「日本赤十字看護婦訓誡」は佐野の訓示が集大成されたものとしている。また現在の佐賀大学における看護教育目標と比較検討し、現在では実践面に重点が置かれ時代的な変化がみられるとしながらも、看護学生への聞き取りによって、根底には佐野が説いたことが受け継がれていることを解明している。

日本赤十字社における佐野常民の役割を看護婦養成との関連で位置づけた意義は大きい。

精煉方・海軍所など佐賀藩の近代化に大きな役割をはたし、明治になれば兵部少丞、工部省大丞、元老院議官として活躍しながら、西南戦争で博愛社を設立したことは、万国博覧会の影響だけでなく、佐野の医家の系譜、緒方洪庵の適塾での訓育の影響が大きかったとみなせる。このことの検討が肝要であることの指摘になっている。

看護学専攻の分野からの分析は、殆どなかったことから、この度の解明の意義は大きい。

２、蒼海副島種臣の書研究　－書風変遷を中心として－

佐賀県立美術館　福　井　尚　寿

〈評〉

蒼海（副島種臣）の書風変遷を研究史を整理したうえで、作品の製作年代を検討して、蒼海書の解明に新しい視点をもたらしている。

蒼海全集には2377首の漢詩が収録され、蒼海書は3000点に及ぶとされていることから、蒼海書の書風の変遷をたどるのは容易でないことが窺われる。蒼海書では制作年代を記したものが少ないことから、制作年代を基準に分類した研究史と独自の調査を踏まえて検討している。

明治16年９月から明治29年冬まで、齢にして56歳から69歳までの14年間を充実期とし、それ以前を前期、以後を後期と把握すれば、書風変遷が概観できるとし、前期と後期の書風についても考察している。

財団法人鍋島報效会研究助成
研究報告書　第４号

2009年10月

発行　財団法人鍋島報效会
佐賀県佐賀市松原二丁目5-22
TEL/FAX 0952-23-4200
URL:http://www.nabeshima.or.jp
印刷　㈱佐賀印刷社